

平成24年度 大津市子どもと子育てに関する 保護者の意識調査 “大津っ子”子育てアンケート その2

調査の経過

この報告書は、5歳児と小学1年生の子どもを持つ保護者に対し、就学前後の子どもの発達の心配や生活実態、学齢期の子育てに関する保護者のニーズを把握し、学齢期の相談や子育て支援の必要性とその内容を検討するため、「“大津っ子”子育てアンケート その2」として調査を行った結果をまとめたものです。

今回の調査（平成25年1月～2月）で明らかにしたいことが三つありました。一つ目は、子どもの年齢や所属する集団が変わることにより子どもの家庭での過ごし方や母親の育児意識・心身の疲労度がどうか、二つ目は、「就学」という大きな節目で子どもの変化および保護者の不安や心配・関心はどうか、三つ目は、療育に対して保護者はどのような思いやニーズを持っているか、です。

これらの目的に対し、平成21年度に2、3歳幼児を持つ保護者対象に実施した「“大津っ子”子育てアンケート」の追跡調査としての項目に加えて、就学をめぐる課題を検討する項目を加えた意識調査を、市内同一学年の1/3の保護者を対象に実施しました。さらに、平成21年度の調査時に療育教室を利用していただいていた子どもの保護者には、療育を利用していた時のことを振り返っていただきました。

調査にあたっては、大津市総合保健センター、やまびこ総合支援センターやまびこ園・教室、北部子ども療育センター、東部子ども療育センター、子育て総合支援センター、保育課、学校教育課が部局を越えて協力・共同して取り組みました。

また、研究者として奈良教育大学の瓜生淑子教授に調査チームに参画していただき、具体的な内容・方法の決定も含め、多大なるご協力をいただきました。

調査結果の要旨

今回の調査を実施して、以下のような結果と課題が把握されました。

まず、保育園・幼稚園5歳児・小学1年生（以下、全般群）の3割、療育経過児の9割を超える保護者がわが子の発達について心配していることが明らかになりました。就学に際して、わが子の発達や学校生活（安全面も含む）、友達関係についての心配が高く、3年前の調査と比較しても、わが子の成長や自分の育児に対する不安は増していました。一方、子どもに対する肯定的なまなざし（子どもと過ごすのは楽しい、子どものよいところに注目できるなど）は、3年前と同様、高い水準で維持されていました。これらから、子どもへの肯定的な気持ちはあるが、学校や社会生活との関係において子どもの育ちや自分の育児には不安や心配があるという両面的な意識を持っていることが伺われました。特に、療育経過児では、その傾向が顕著であり、就学後の相談体制の充実を希望する意見が多かった結果も含めると、就学後も継続的な相談支援が受けられる体制が必要と考えられました。

次に、小学1年生を持つ保護者（全般群）への調査では、放課後の子どもの過ごし方に不安や不満を感じ、子どもが安心して遊び・学べる放課後支援を求める意見が寄せられました。また、療育経過児は、2、3歳児の時よりも、テレビやゲームの利用時間が増えています。以上のように、学齢期では、全般群、療育経過児それぞれのニーズに合わせて、子ども達が安心して遊べる場や活動の保障など放課後支援を構築していく必要があると考えられました。